

東海道から世界へ

家康は亡くなる前の約10年間、駿府で過ごしました。その期間にオランダ、スペイン、イギリスの大使が、

外国から「皇帝」と呼ばれるほどの権力を持つ家康の元を訪れ、たくさんの贈り物をしました。有名な品の

一つが静岡市駿河区の久能山東照宮博物館にある「洋時計」です。

1611年、スペイン国王はセバスチャン・ビスカイノに日本へ行くよう命令しました。1609年に千葉

県沖で沈没したスペイン船の生存者を、家康が手厚く世話したことへのお礼をするためです。ビスカイノは江戸で将軍秀忠に会った後、東海道を通過して家康に会いに行き、洋時計を贈り

ました。各国の大使からの贈り物の中には眼鏡もありました。当時の日本で作られていなかったと

され、「目器」と呼ばれ、家康が愛用しました。同じ時期に家康は、豊臣秀吉が朝鮮を攻めた

ためになくなった朝鮮との国交を回復させたいと考え、1607年に江戸で秀忠との話し合いを実現させました。後に「朝鮮通信使」といわれる朝鮮の使節は船で大坂（現在の大阪）まで行き、東海道を通過して駿府や江戸



重要文化財「洋時計」と「目器」
く のうざんとうしやうくわいはくぶつかんぞう
(久能山東照宮博物館蔵)

へ向かいました。家康の外国との交流は自らが整備を始めた東海道などの道があつてこそ花開いたのです。

かんしゅう おうみ としひで ふん かちやうふん かざいだいに か しゆにんふん かざいしやうさかん なかむらやういちろう しずおかしきし はくぶつかんちやうほんごうかずと とうきやうだいしりやうへんさんじよきやうじゆ
(監修:近江俊秀・文化庁文化財第二課主任文化財調査官、中村羊一郎・静岡市歴史博物館長、本郷和人・東京大史料編纂所教授)